

関東学院大学 学生会員 田代 久

関東学院大学 正会員 昌子 住江

(1) はじめに

横浜市金沢区は、横浜開港以後の町と言われる横浜のなかで、中世以来の歴史と、江戸から・明治・大正にかけてリゾート地としての性格を持ち合わせていた。近年その特性を現代の金沢区のまちづくりに生かそうとの声があがっているが、その試みはまだ始まったばかりである。金沢区は長い海岸線を有しており、区内の土地のかかなりの部分は埋立によって造成された。金沢区における海岸線の変遷については、「横浜の埋立」(横浜市)や「新金沢八景づくり基本構想」資料(金沢区)等の文献があるが入江、や潟の埋立については不明の部分も多い。

本研究では、特にこうした入江や潟の埋立、造成について、既存資料を中心にまとめながら、金沢区における市街化の動向を探るものである。したがって、1963年以降の金沢地先埋立事業には触れない。

(2) 金沢区の埋立と歴史的背景

1) 江戸期の新田ならびに塩田開発

現在の金沢区に当たる地域は(久良岐郡)、鎌倉・室町期において金沢文庫などの存在から鎌倉文化圏の中の文教の地となっていた。江戸時代になると文教の地から、農業・製塩業の集落となっていった。水田の少ないこの地では、長い年月をかけて新田が造られた。1668年永島裕伯(号は泥亀)が走川及び平潟の2カ所に新田を開き、塩田2町歩、田15石(約3ヘクタール)を得た。これが泥亀新田の起こりである。続いて1785年六代目永島段右衛門が、勘定奉行の岸彦十郎の許しを得て金沢入江新田の埋立工事を始め、翌1786年一応完成した(約30ヘクタール)。そしてこの一帯を泥亀新田村と名づけた。この後、泥亀新田は、洪水、津波など災害により崩壊したものの、1849年幾多の苦難を乗り越えて、九代目永島段右衛門により水門と新田を修復した。

なお、1763年には、寺前村の山田某が谷津にあった塩田を埋立て大沢新田を造った。

2) 明治から大正にかけての金沢

明治維新以降、この地は内外有名人の避暑避寒の別荘地となった。伊藤博文が帝国憲法の夏島草案を練った別荘もこの地域にある。文豪直木三十五もこの地を愛した一人である。

1900年(明治30年)町屋の柴田氏により静岡県浜名湖から蓮が持ち帰られ、これを泥亀新田に植えたところ成功した。蓮は、泥亀新田で急激に収穫量を増やしていった。

江戸時代金沢のほとんどの村がやっていた製塩業も、時代の進歩、発展により原始的な製塩法がなくなると、1905年の製塩地整理法により1910年をもって金沢の製塩業は、終わりを告げた。

1913年以降使用しなくなった塩田をそのまま20年以上も放置していたが、何とかしなければとの思いから金沢の有志から金沢町耕地整理組合が組織され、この塩田の埋立工事をすることになった。この工事では、平潟湾の土砂をサンドポンプを用いて埋めた。この工事は、昼夜続けられ付近の住民は、機械の騒音で眠れなかった。色々の困難を乗り越えて、1927年9月に19町歩の埋立工事が完了した。

1927年4月1日湘南電鉄が開通、翌1928年に乙舩海水浴海水浴場を開いて、京浜地区の海水浴利用者の便をはかった。

3) 戦時期の軍施設地と宅地化

しかし1899年(明治32年)には、要塞地帯法公布により、金沢のなかにも出入禁止地域ができていき

キーワード：横浜市金沢区、埋立、近郊リゾート

連絡先：横浜市金沢区六浦町4834・TEL045(781)2001FAX045(786)7098

海水浴や避暑避寒地としての金沢も名のみとなっていた。

観光地であった金沢も軍都横須賀から近いとの条件から、満州事変以降、時代の要求を反映して軍事工場が金沢に立地するようになった。日本飛行機株式会社、海軍航空技術廠支廠、などの兵器工場が昭和10年代に数多く造られて、金沢はさながら兵器廠のような地域になっていった。その工場の労働力として全国から多く工員が金沢に集まり、人口が急激に増加して住宅が必要になったため、泥亀新田や金沢塩田跡、六浦塩田なども住宅化していった。

4) 戦後における住宅地化動向

金沢区泥亀町の蓮田が埋立られ、住宅団地の造成が行われたのは、昭和30年代後半である。金沢区の中心に隣接する蓮田地帯は、早くから開発が望まれたが、戦後の食糧事情から、埋め立てられずにいた。しかし国道16号の改良に伴い、1955年には京浜急行の参加を得て「金沢振興開発協議会」が結成された。1960年3月に工事を始め、途中で揚水ポンプなどを工事に取り入れ、1966年埋立工事は完成した。

平潟湾の埋立は多くの反対があったものの、1963年から京浜急行電鉄(株)により埋立られ、1966年3月竣工した。

(3) 埋立造成地の分類

① 金沢塩田

② 六浦塩田

③ 小上馬新田(こじょうま)

④ 円通寺新田(えんつうじ)

⑤ 泥亀新田

⑥ 大沢新田

⑦ 赤井新田

⑧ 中州の埋立

⑨ 走川新田

⑩ 1931年頃の埋立

⑪ 京浜急行、横浜市による1963年から

1966年にかけての埋立

⑫ その他不明な埋立

(明治以降の民間埋立地と戦時期の軍事施設などによる埋立は、不明な点が多い)

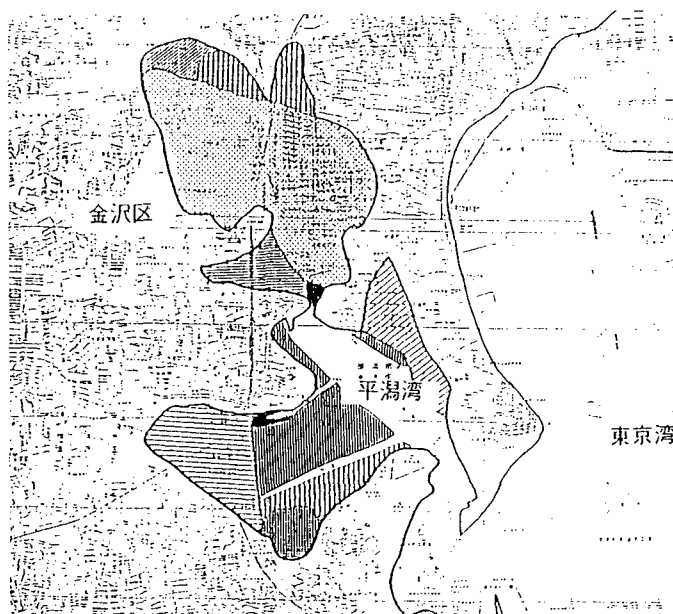


図 金沢区における埋立造成地の分類

(『史話・私の横浜地図』)

「金沢の今昔」を参照し作成)

(4) まとめ

鎌倉時代金沢の地は、鎌倉文化圏に入り称名寺など文教の地となっていた。室町、江戸と進むなかで独自の文化圏を形成していった。そして横浜開港後、風光明媚なこの地には、避暑避寒の地として別荘が多く建てられた。しかしこの地は、京浜工業地帯と軍都横須賀の中間にあり、工員や軍人の居留の場として十分な立地条件を有していた。そのため急激な住宅化や飛行場の建設などにより美しい景観がほんの2～30年の間に一気に崩れたのである。現在金沢区では、アメニティ資源を生かした魅力あるまちづくりを進めている。埋もれていた歴史的な遺産を再評価するとともに、これらを失ってきた経過を再検討することは、こうしたまちづくりを考える上で示唆的である。